

1. 委員会研究テーマ

一人一人の生活を豊かにし、自立する力を育てる支援のあり方
～「できる状況作り」を取り入れた生活単元学習のあり方～

2. 研究内容

(1) 公開研究授業

期日	平成 24 年 11 月 7 日(水)	単元・題材名 「友達と協力して 6 7 8 組作品展を開こう」
授業学級	栗ガ丘小学校 6、7、8 組	授業場面
授業者	館川誠教諭、中島志乃教諭、 宮下佳恵講師、川上たつ江 支援員、外谷美香支援員	12 月の「6、7、8 組作品展」で販売活動を行いたいという願いを持ち、販売品の製作を始めた子どもたちが、分担の販売品の製作を行う場面で、自分でできる部分が増えたり、自分なりに工夫したりしながら製作活動に取り組む。
指導者	北信教育事務所学校教育課 水内 秀雄先生	

(2) 研究内容

昨年度より教育会研究テーマが「子どもと共に創る授業のあり方」に変わり、「何をどう教えるか」という視点より「子どもがどう学んでいこうとしているのか」という視点で学ぶ側の立場に立った授業のあり方に目を向けていこうとしている。それを踏まえ、特別支援教育研究委員会では、「自立する力を育てる支援のあり方」に焦点をあてて研究を深めてきている。「自立」の姿を「それぞれの障害の状態や発達段階に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きようとする」と定義づけ実践研究を行ってきた。具体的には、現在の生活を豊かで自立的なものにし、その生活を積み重ねていく中で、知識・技能の定着をはかり、自信や意欲を高めていくことを通して、より豊かで自立的な生活につなげていく方向を大切に考えてきた。しかし昨年度の実践より見通しを持って取り組めるようにするにはどうしたらよいか、より精一杯取り組める支援はないだろうかという課題が残った。特に領域・教科をあわせた授業において、児生の年齢差や多様な児生の集団の中で一つの単元を設定するが、それが存分に活動し満足感・成就感を分かち合える活動に繋がるかが大きな課題である。すなわち一人一人が精一杯取り組めるような状況、首尾よく成し遂げられる状況を設定することが大切であり、これらが主体的・能動的に活動することにも結びつくと思われる。そこで、本年度はここ数年研究を進めてきた個別の指導計画から児生をとらえ、単元を設定し、修正を加えその評価を次へ結びつけることを中心に据えながら、より主体的・能動的に活動できるような「できる状況作り」に焦点を当て研究していきたいと考えた。この状況下で作り込む、思い切り遊びこむことで、どの児生も達成感・成就感を得ることができ、その蓄積が自信意欲にもつながり、より豊かで自立的な生活にもつながると考えられる。

〔具体的研究内容〕

○個別の指導計画の教育課題を確認

○できる状況作りの「手だて」〔個別の指導計画と関連させて〕

① 児童の興味関心にあったテーマや活動内容の設定

② 確かな目当て・見通しを持って取り組むための活動の流れの工夫や場の設定

③ 一人一人が存分力が発揮できる道具や補助具

○できる状況作りに対する評価と修正

① 児童の姿をプラスの視点でとらえ、児童が願っていることを読み取る

② 活動できたか行動観察

③ 製作後の児童や教師の評価

○次時の願いと支援の設定

3. 研究の成果

(1) 実際の生徒の姿から

- ・授業のはじめの段階では、児童が全員集まり「あゆみ展」での作品のコメントを伝えたことは、子どもたちへの意欲付けにつながったが、子どもたちが「誰の作品のこと」と尋ねていた姿から、子どもたちは自分の作品についてどう評価してあるのか聞きたかったのだと考える。一人一人について評価を読んであげたり、目標を決めたりするなど個々への支援が必要であった。
- ・N生については手順を示したり、タイムタイマーを使って時間を確認したりしながら活動に向かうことができていた。本時でも緊張していて、教師に対していつもとは違う行動が見られたが畳コーナーに行って情緒を安定したりしながらツリーを4つ作りあげていた。
- ・K生は先生のキーワードを頭に入れて、時間がかかって苦労しながらも安全に切っていた。色塗りやボンドでとめる場面では、あきることなく、よく集中して取り組んでおり、時間を超越して作成していた。



(2) この事例から明らかになったこと

本年度は「できる状況作り」について焦点をあて、研究してきた。その結果次のような主体的姿が見られた。

- ・見通しが持てず、途中で中断してしまう児童に対しては、手順表やタイムタイマーを使うことにより見通しを持たせることで、最後までやり遂げることができる。
 - ・興味が移りやすく、飽きてしまう生徒には、友達と協力する場面を設定したり、教材の工夫したりすることで、集中して取り組めることができる。
- このような姿は10月の事前見学をさせていただいたときには見られなかったが、「できる状況作り」を進めていく中で芽生えてくるものだと考える。

4. 来年度への課題

(1) 研究の成果から来年度の研究へつなげる課題

- ・本年度はサブテーマを変更して「評価を生かした授業改善」から「できる状況作り」に焦点を当て、より現場に即したテーマとしたが、テーマが決まるまでに時間がかかり、個別の指導計画とのつながりがやや薄くなってしまった。来年度もこのテーマで継続して研究していきたいが、個別の指導計画とのつながりを大切にしていきたい。
- ・講師の水内先生からもテーマについてはこの方向でよいとご助言をいただいた。ただしそのできる状況の意味や定義を共通理解しておくことがより深い研究につながると思う。定義作りを来年度は取り組むとともに、「できる状況作り」にはどのようなものがあるか、どうしてこの児生にはこの環境設定をしたかまたは支援をしたかと言うことを明確に研究委員会で明確にして公開授業に臨めるようにしたい。

(2) 研究推進や運営について

- ・例年通りの運営であったが、例年より2週間早まったため、10月以降がやや忙しく、十分な研究ができなかったと思われる。来年度以降も同じ日程ならば、より計画的に進めていく必要がある。

(3) その他

- ・会場校の栗ヶ丘小学校にはいろいろな面で支援していただきありがたかった。